

# まごころだより

2019.5月号



94歳になる私の母は「長生きするというのは寂しくなるということだ」と言う。同級生も友達もどんどん亡くなり、話し相手がいなくなった。転ぶと大変と手押し車を使っの散歩も控えるようになった。趣味の花壇作りも体力的に出来なくなった。電話も耳が遠くてかけられない。手紙も手が震えて書けない。母の周囲からどんどん人の気配がなくなる。今では家族以外で話をするのは、病院の先生くらいだ。人間関係が希薄になっていくに従って、物忘れもひどくなり、人の名前も物の名前もなかなか出てこなくなった。ボケが始まったのではないかと本人も気にしている。話し相手に飢えている母は、私が行くと喋りっぱなしである。3人暮らし(私の妹とその息子)の母でさえこうである。まして一人暮らしだと、来客でもない限り話し相手は誰もいない。だから優しく話しかけてくれて「うん、うん」と話を聞いてくれる人はいい人だと思ってしまうのだろう。おれおれ詐欺も「ばあちゃん頼む。俺困っているんだ」と自分を頼って電話をかけてきてくれたのだから、なんとかしてやりたいと思ってしまうのだろうか。そんなことを思う出来事があった。



利用者の人が、訪ねて来た見知らぬ人と出かけたという事が立て続けに2件あった。いずれも日曜日の出来事である。相手が誰かわからないというのは不審であるが、一



緒に出かけたというだけで、特に犯罪に巻き込まれたわけでも、被害にあったわけでもない。当人は誰とどこに行ったかは覚えていないが、訪ねてきた人に悪い印象を持っていないし、それほど嫌だったとも思わなかったようだ。一昔前なら、問題にならないような出来事であるが、今は道を尋ねられても相手になってはいけなと子供に教えなければならないご時世。寂しいことではあるが用心するにこしたことはない。私たちにできることは、知らない人と一緒に出掛けないようにと言うくらいである。録画機能付きのインターホンの設置や録音機能付きの電話を設置するというのもあるが、後で確認することはできても、出かけることは止められない。でもこんなことが続くと「やっぱり一人暮らしは危ない。施設に入ってもらおう」ということになってしまう。



最近国が高齢者の在宅生活を推奨していることもあって『地域のつながり、支え合い』が叫ばれている。地域毎に町内会や福祉関係者それに老人会・児童クラブなどが手を組んで、誰もが安心して住み続けられる街づくりをしようというのである。選挙の時には「安心・安全な街づくり」がスローガンに上がる。でも、赤ちゃんからお年寄りまで誰もが安心して暮らし続けられる街というのは難しい。誰かにとっての安心・安全は他の誰かにとっての不安・危険材料となってしまう。現に保育園や児童養護施設の建設がいろいろな理由でなかなか進まない

いう話は記憶に新しい。デイサービスだって近所の了承がなければ開設できない。自分たちと同質の人とは一緒に暮らせるが、そうでないものはいろいろ理由をつけて排除したいというのが本音のような気がする。

高齢者も地域の連携や見守りがあれば、誰もが在宅を続けられるというのではない。ウロウロして側溝に落ちないかと心配だ。迷子にでもなったら大変だ、と近所の人から言われ、母親の在宅生活を断念させざるを得なかった息子がいる。IH調理器具を使っている、火事を出さないか気がかりだと言われ、対応に困り親を説得して入所にこぎつけた娘もいた。近所の人は見守りをして、いろいろ問題点を出してくれる。しかし善意の見守りや忠告は、本人の希望を叶える形で決着するとは限らない。子供は、近所の人に迷惑はかけられない、これも本人のためと施設入所を決断する。その決断は親にとっては不満であるが、近所の人にとっては安心・安全である。

こんな話をすると友人は「孤独死する心配がないから、施設入所は本人にとっても安心・安全だよ」と言う。なるほどそうかもしれない。そうだよね。『孤独死』も問題だよねと思う。そんなことも反映してか、終の棲家を施設に求める人は年々増えているという。でも希望通り施設に入所できれば問題ないのだが、現状では入所できない人も出てきそうだ。そのとき自宅は孤独死の心配がない状態になっているのか。在宅が安心できる状況にあるのか。それは今のままでは心もとない。

『住み慣れた地域・住み慣れた自宅で最期まで』を実現



するために、私たちはまごころ分家を開設した。近所の人気が気軽に声を掛け合い、立ち話ができるような関係になって欲しい。そのための橋渡しとなるような場を提供しよう。まごころの利用者と交流することによって高齢者への理解を深めて欲しい。体の自由がきかなくなり日常生活がおぼつかなくなる。物忘れがひどくなり、認知症を心配するようになる。こんな時のつらさや寂しさを知って欲しい。そしてまごころの利用者の多くがそうであるように、それであっても、助けがあれば、自宅で暮らしていけることも知って欲しい。いずれ私たちも通る道だ。助け・助けられるのはお互いさまだ。若者もお年寄りも、健常者も障がい者も住み慣れた自宅で支え合って暮らせるそんな街にしていきたいと思う。そのために

も、分家の活動を進化させていこうと思う。

この5月からまごころは活動の更なる進化・充実を図るため新体制を敷くことになりました。それに従って、このまごころだよりもいろんな職員が担当することになります。新体制のもとでのまごころの様子を今後も発信していきます。これからもよろしくお願ひします。



=====

この“まごころだより”をお届けする頃は既に新元号“令和”に代わっている事と思います。昭和から平成に移り変わった31年前は昭和天皇が崩御された事により元号が代わりましたが、今度は生前退位ということで平成天皇には本当にお疲れ様でした、ありがとうございますと言う労いの思いを抱いているのは私だけでしょうか。令和天皇にはご両親の国民に寄り添うお気持ちを大事に受け継いで行って頂きたいものです。そういう“まごころ”にも4月から幼い子供達が来てくれるという変化がありました。3歳と4歳の男の子です。受入れ前は色んな心配をしました。お年寄りの人と親しんでくれるか、職員に懐いてくれるか、まごころへ嫌がらずに来てくれるかなど不安ばかりでしたが、そんな心配は全く無用でした。子供達が緊張をしていたのは数日だけで、直ぐに慣れてくれました。その順応力には驚かされ、甘えるしぐさなど見せられたらもうメロメロになります。高齢者の顔もいつもとちょっと違う優しい笑顔が見られるようになりました。小さな子供は想像以上に心に変化を起こす力を持っているようです。そのうち子供達が高齢者にまわり付く日が見れるようになるかもしれません。又、そう願っています。私達はこの子供達の親にはなれませんが、沢山の愛情を注いでやりたいと思っています。

## 5月行事の予定

1日(水)	小物づくり
14日(火)	林夫妻の歌謡ショー
16日(木)	惣菜またはお菓子づくり
20日(月)	ピアノとバイオリン演奏
24日(金)	ハーモニカ演奏
27日(月)	食事会
28日(火)	民謡と三味線